

「平和の俳句 13」

2016年01月06日

「東京新聞」の「平和の俳句」は大きなうねりになっている。平和を求める凝縮された声が聞けて、仲間が増えていくことは嬉しい限りである。12月掲載分の俳句から。

「民の声載せて新聞今朝も来る 山浦善貞 (77歳)」くいとうせいこう 「平和の俳句」がいったん終了と聞いて作ってくださったそうだ。継続を祝した五七五。まず朝刊のこのコーナーを見るという人多し。> 私も真っ先に「平和の俳句」を読む。民の声が聞けるからである。しかし、最近のマスコミは安倍政権に忖度するものが多く、民の声を伝えなくなっている。安倍政権のメディア支配の嵐が吹き荒れているのが現実ではないか。「正門前九条となりて人は立つ 坂入祥次 (66歳)」くいとうせいこう 確かにそうだ。平和のための抗議を行う時、人は拗って立つ概念の化身となる。一人の個人が歴史に貫かれる。その感覚が句に。> 概念が化身になるとは面白い。私は国会を囲むデモに行った時は、必ず正門前に行く。スピーカーの顔を見ながら、メッセージを聞けるからである。私が九条になっているとは思わなかったが。「二人のみの孫をお国に上げられぬ 下山信行 (75歳)」くいとうせいこう 「娘を二人育てて二人の孫しか居りません。お国のためと言っても戦地へ出す事は出来ません」とはがきに書かれた通りに伝えます。> 私は一人息子に二人の孫が与えられた。「九条の会」のメンバーは、やはり時間の取れる高齢者が多い。飲み会などで打ち解けて話すと、孫を戦争に送りたくないという話に花が咲く。孫が反戦、平和のキーになっている。次々世代を案じる老人たちの声を軽んじるなど言いたい。「武器もつな信じる心と意志をもて 山下柁樹 (16歳)」金子兜太 作者は高校一年生。若者が率直に平和を訴えている声がここにある。平和を守るためには、それを信じ、守り貫く意志が大事。> 「安保関連法案」反対のデモに若者の参加が目立った。自分たちの問題と捉えたのであろうか、頼もしい限りであった。平和はおのずと来るものではなく、作り上げていくものである。政治が国民生活を決め、動かす。若者たちの政治参加に期待したい。

「平和の俳句 戦後70年」から。「声挙げる蟻を嘲るきりぎりす 吉田帆乃未 (17才)」「安保関連法案」に反対する無数の蟻が声を挙げたが、嘲るようにきりぎりすは強行採決した。蟻は小さいが、忍耐強く執念深い。いずれの日か、きりぎりすが降参して、蟻の勝利を見る時が来るであろう。「氷雨道たどる難民幸祈る 中田三郎 (70歳)」シリアから、中東、アフリカから難民たちが生きることを求めてヨーロッパに向かう。当てがある訳ではない。氷雨降る中を、小さな子どもを連れた家族が列をなして黙々と歩く。彼らに、幸いあれと祈りたい。「仕方なく沖縄だけは仕方なく 大場晴男 (84歳)」沖縄は、時間稼ぎの捨石作戦で、4人に1人が死ぬ激しい地上戦を経験した。戦後も、米軍基地で苦しみ抜いた。今度は辺野古新基地を作るという。東アジアの要で、地理的に仕方ないとされた。仕方ないとは言わせまい。沖縄は平和を発信する要石の地理にあり、その資格がある。

「平和の俳句」は世界からも注目されている。欧州連合(EU)の初代大統領を務め、元ベルギー首相のヘルマン・ファンロンパイ氏(68歳)は俳句愛好者で、作品を寄せた。

「陽を海を星を見る者和を愛す」。英語では“Who looks at the sun / At the sea, at the stars / Loves peace.”である。日本語に翻訳した木村聡雄日本大教授は「天と地を対比させながら平和を表現した雄大さがファンロンパイ氏らしい」と評している。自然の壮大さに見入り、美しさを愛でる者は平和を愛する。目先を追うだけでなく、自然の大きさと美しさに触れ、自らの小ささを知ることは平和につながる。